

鎌高新聞

発行 神奈川県立鎌倉高等学校 校長室

令和5年2月21日 第23号

日坂同窓生シリーズ第6回

横浜薬科大学
准教授 田口 真穂 様



鎌高生のみなさん、こんにちは。私は、1993年3月卒業（44回生）の田口真穂と申します。現在、横浜薬科大学 臨床薬学科のレギュラトリーサイエンス研究室で准教授をしています。私が鎌高生の時には、横浜薬科大学はドリームランドという遊園地で、夏休みには後輩がお化け屋敷や着ぐるみのアルバイトをしていたり、冬には友達とスケートをしたりと多くの思い出がある場所でした。今は、この地で地域医療を担う薬剤師の育成や、医薬品に関する研究を行っています。

まず、薬学に進学したきっかけとしては、高校時代に化学を学んだことでした。2,3年生の時にクラス担任だった堀川輝夫先生の化学の授業がとても分かりやすく、一番好きな教科でした。大学では好きなことを学びたいと思い、最初は理学部の化学科を希望していました。しかし、自分のライフプランを考えて、留学や出産・介護等で仕事を離れた場合、国家資格を有していた方が復職に有利だと思い、薬学部に決めました。

薬学部（現6年制）の卒業生のほとんどは薬剤師免許を取得しますが、病院や薬局の薬剤師以外にも様々な進路があります。私は、薬剤師として東京医科大学附属病院に就職後、同大学の薬理学研究室に転籍して、臨床薬理系の研究に従事しました。その後、留学先のアメリカの医科大学では、がん性疼痛に対する鎮痛薬の依存性や、乳がんや前立腺がんの増殖メカニズムに関する研究を行い、帰国後は、キリンビール株式会社の研究所で、生活習慣病の研究を行っていました。以前関わっていた乳酸菌が、免疫ケアの商品となって流通しているのを目にしたり、開発した製剤が臨床現場で使用されていたりすると、研究者冥利に尽きる思いです。

出産後は、しばらく育児に専念していましたが、再び臨床に戻り、横浜市救急医療センターで薬局の管理者を務め、医師や看護師、事務の方々と連携して、急病の患者さんに対応していました。大学教員となった現在も、OJT（On-the-Job Training）の一環で、薬剤師業務に携わることがありますが、困っている患者さんが「ありがとう」と、ほっとした表情を見せてくださるときには、この仕事をしていて良かったと感じます。

みなさんも、病院で診てもらった後に、薬局でお薬をもらったことがあるかもしれません。患者さんに医薬品を安全に供給することは、薬剤師の仕事の一つですが、今は薬剤師に期待されている業務が「モノ」から「ヒト」へと大きく変化しています。具体的には、これまでは「医薬分業」のもと、処方監査（医師の処方した医薬品の量や内容が正しいか、他の薬と

飲み合わせなどの確認）や調剤(薬の秤量や混和、取り揃え)などの「対物業務」が中心でした。今の薬剤師は、薬(物)とも向き合いつつ、より患者さん（人）と向き合うべきとの考えのもと、「対人業務」の重要性が高まっています。

つまり、個々の薬物治療を適正化するために、お薬をお渡しした時だけではなく、患者さんが服用を始めた後の効果発現や副作用のモニタリング、服薬状況のフォローアップを薬剤師が行います。効果や副作用の評価のためには、呼吸音や酸素飽和度、血圧・脈拍、体温などのバイタルサインのフィジカルアセスメントや、情報を聞き取るコミュニケーションのスキルが必要となってきます。そして、一人一人に合わせて 24 時間相談や在宅訪問などの役目も担う「かかりつけ薬剤師」という制度もできています。

ところで、みなさんは、「がん」と聞くとどのようなイメージですか？今は 2 人に 1 人ががんになる時代です。以前は長期入院が主流でしたが、今では通院して治療する外来治療を行う方が多くなっています。定期的に病院で抗がん剤の点滴を行い、自宅で経口の抗がん剤や副作用を抑える薬を使いながら、通常の生活と治療を両立させ、がんと共に生きています。薬局薬剤師は患者さんのご自宅での様子をフォローして病院と連携して治療を行っています。また、終末期の患者さんには、ご自宅で点滴の薬やポンプの痛み止めを使用できるように、無菌的に注射調剤ができる薬局も増えてきています。

さらに、日本は超高齢化社会を迎え、高齢者のポリファーマシーが問題になっています。高齢者は複数の医薬品の併用を必要とする慢性疾患の罹患率が高く、さらに複数の疾患を抱えて、複数医療機関を受診することより、医薬品の処方数が増加し、薬物相互作用による有害事象が発現しやすくなることが知られています。一方で、加齢に伴って腎臓の排泄機能などの身体機能が低下することより、成人の用法・用量で使用すると過量投与となり有害事象のリスクが高まります。そこで、処方の適正化を目指して多種類薬剤を処方された患者さんの症状をみながら、薬剤師が処方医に減薬や用法変更等を提案することが推奨され、様々な仕組みが設けられています。まさに「医薬協業」の実践です。今後益々多様化する高度な薬学的知識を活用する対人業務を充実させるために、調剤などの対物業務は自動機械化や ICT 化が進められています。

私は高校生活を鎌倉高校で過ごすことができて本当に良かったと思っています。湘南の海と富士山を見ながら、昼休みや放課後も生徒会活動や部活の部室で友達や先輩後輩と過ごしたり、文化祭や体育祭、合唱コンクールなどのイベントに向かって真剣に盛り上がったりと、かけがえのない思い出がたくさんあります。うちの大学にも鎌高卒業生がいますが、会うといつも笑顔で挨拶をしてくれて、病院や薬局の臨床実習先でも、「コミュニケーション力が高く明るい学生さんですね」とよく言われます。特に、鎌高生はマニュアル通りではない、イレギュラーな事態における対応力も素晴らしく、まさにこれから変化する社会に求められる“人財”になれると思っています。伸び伸びとした恵まれた環境で、勉強に励みつつ、自主性や行動力、協調性を養い、悔いの無い学生生活を送ってください。鎌倉高校、青春偏差値日本一！